

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：31301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13143

研究課題名(和文)人々の交流の場としての理想的なスポーツ環境の在り方の検討

研究課題名(英文)Examination of ideal environment of sports as a place for people to interact

研究代表者

高橋 徹(Takahashi, Toru)

仙台大学・体育学部・講師

研究者番号：30721550

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、人々の交流の場としてのスポーツ環境のより良い在り方を理論的に解明することにより、スポーツ環境整備の基礎となる理念を構築することであった。スポーツによる地域社会の再生を目的とした運動施設や公園などの環境整備が各地で進んでいる。その背景には、スポーツによって地域共同体が形成されるという考えがある。しかし、そのスポーツの価値は単に環境を整備するだけで実現できるものではない。その価値を実現するためには、「行う」「みる」「支える・創る」というスポーツとの関わりを通して、人々が民主主義を実現するための態度と思考を育み、その人々が集まることで共同体を形成することが求められるのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果により、継続的な地域の活性化やコミュニティの形成にスポーツが寄与し続けるための方向性を示すことができる。またこれは、平成23年に中央教育審議会スポーツ・青少年分科会が今後検討すべき課題として示した「住民が主体的に参画する地域のスポーツ環境の整備」という課題の解決にも貢献すると考えている。他方、本研究においてアメリカの哲学思想の議論を整理したこと、およびそこでの議論が体育・スポーツ科学分野の研究へと如何にして適用され得るのかを検討したことは、当該分野における基礎思想研究として、アメリカの哲学思想を取り扱った研究資料の提供に繋がるという点で学術的意義が認められると考えている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to construct a basic idea of sports environment improvement by theoretically elucidating the better way of sports environment as a place for people to interact. Environmental improvements such as sports facilities and parks for the purpose of revitalizing local communities through sports are progressing in various places. Behind this is the idea that sports form a local community. However, the value of the sport cannot be realized simply by improving the environment. In order to realize that value, we foster attitudes and thoughts for realizing democracy through relationships with sports such as "do", "see", and "support/create", and form a community by gathering those people. Is required.

研究分野：体育・スポーツ哲学

キーワード：プラグマティズム 民主主義 スポーツ 共同体 体育 環境

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「スポーツ基本法(平成23年)」の条文には、スポーツが人と人との交流および地域と地域との交流を促進し、地域の一体感や活力を醸成するものであり、人間関係の希薄化などの問題を抱える地域社会の再生に寄与するものであることが明記されている。また、旧来のスポーツ振興法からの改正点として、「多様なスポーツ機会の確保のための環境の整備」という項目が追加された。このような社会的背景もあり、スポーツを通じた人間関係の構築が地域の活性化にも大いに寄与することが周知の事実となり、その様なスポーツの持つ力を十分に活用することを目的とした環境の整備が各地で進んでいる。しかし、スポーツ施設などのハード面での環境の整備が進んだとしても、その施設を十分に活かすための仕組みなどのソフト面での整備が進まなければ、単に物的な環境を増やすだけに終始してしまうことが危惧される。すなわち、施設を整備した先には、より良いスポーツ環境を形作るための理念に基づく仕組み作りが求められるのである。本研究では、このより良いスポーツ環境整備の基礎となる理念の構築を試みた。

なお、このような着想に至った背景には、公共空間としてのスポーツ環境の必要性、プラグマティズム思想におけるコミュニティ形成に関する議論、プラグマティズム思想とスポーツ環境に関する議論の関係性という3つの着眼点があった。公共空間としてのスポーツ環境の必要性について、人々の交流や地域活性化を促進するためには、スポーツ活動が特定の世代や組織に限定されることのない公共空間へと開かれた活動になる必要があると考えた。従って、多世代が交流する場としての理想的なスポーツ環境の在り方を理論的に解明することは、そこにおいて重要な意義を有していると考えた。

プラグマティズム思想におけるコミュニティ形成に関する議論について、アメリカ生まれの思想「プラグマティズム」には、民族紛争や宗教対立など、それぞれが主張する正義同士がぶつかり合う現代社会において、異なる考え方や信念の共存を目指す試みとして注目が集まっている(朝日新聞,2016年5月29日)。プラグマティズムを代表する哲学者J.デューイは、教育活動を社会から仕切られた学校という閉鎖的な空間に押し込むことを放棄し、人と人をつなぐ市民の活動とコミュニケーションの空間へと開くことで、教育をコミュニティの学びへと結びつけるというアイデアを提示した。彼のアイデアは現在、哲学思想としてだけでなく、多世代が共同するワークショップを通じたコミュニティ形成の在り方を裏付ける基礎理論として評価されている。従って、デューイを中心とするプラグマティズム思想におけるコミュニティ形成に関する議論は、人々の交流の場としてのスポーツ環境の在り方を考える上での基礎理論としても評価できるものであると考えた。

プラグマティズム思想とスポーツ環境に関する議論の関係性について、申請者は過去の研究において、J.デューイが提示した経験概念、および教育概念に依拠しつつ、スポーツ経験の教育的価値を明らかにしてきた(高橋,2011a; 高橋,2011b)。また、プラグマティズム思想を体育学の視点から改めて読み解くことの現時的意義、および議論の発展可能性についても明らかにしてきた(高橋,2013)。他方、現在のスポーツ環境が抱える問題点を指摘する議論の整理を進めていた(高橋,2015a)。これらの予備的研究により、スポーツ環境整備の基礎となる理念を構築する上でも、プラグマティズム思想の議論は有用な視点を提供するものであるという結論が導き出されていたことから、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、人々の交流の場としてのスポーツ環境のより良い在り方を理論的に解明することにより、スポーツ環境整備の基礎となる理念を構築することであった。なお、本研究ではスポーツ環境の問題点を指摘する議論の整理、プラグマティズム思想におけるコミュニティ形成に関する議論の把握、人々の交流の場としてのスポーツ環境の原理モデルの構築、スポーツ環境の理想的な在り方の解明、以上の4点の課題を明らかにすることにより研究を進めた。

3. 研究の方法

本研究は当初、3カ年計画の下、研究目的に示した4点の課題に沿って研究を進めることを計画していた。1年目の計画であるスポーツ環境の問題点を指摘する議論の整理では、文献精読を行うことにより、スポーツを通じた人々の交流や地域社会の再生を阻害する要因を明らかにするとともに、そのような阻害要因が発生してしまう理由、およびそうした問題点に対する現状での対策に関する議論を整理した。プラグマティズム思想におけるコミュニティ形成に関する議論の把握では、文献精読を通して本研究が依拠する議論を把握し、研究を進める上での理論的基盤を形作ることを目的とした。2年目の計画である人々の交流の場としてのスポーツ環境の原理モデルの構築では、上記プラグマティズム思想におけるコミュニティ形成に関する議論の把握を基に、それをスポーツ環境に関する議論として読み解くことで、人々の交流の場としてのスポーツ環境の原理モデルを構築することを試みた。3年目の計画であるスポーツ環境の理想的な在り方の解明では、議論の整理で明らかとなった内容に原理モデルを適用することで、現在のスポーツ環境の問題点を解消するための解決策を踏まえた形での、スポーツ環境整備の基礎となる理念を明らかにすることを試みた。

なお、これらの計画のうち、研究を進める中で2年目に計画していた人々の交流の場としてのスポーツ環境の原理モデルの構築を計画通りに実現することができなかったため、途中で計

画を変更し、実際には3年目に と の手順をまとめる形で研究を行った。

4. 研究成果

(1) スポーツ環境の問題点を指摘する議論の整理

この課題については、先行研究を概観することで、そこでの議論を以下のように整理した。

現代社会におけるスポーツ・ニーズの高まりを受けて、その活動の場は以前よりも増大しつつある。それは、スポーツの教育環境の充実として捉えることもできるが、一方でその問題点も指摘されている。例えば、新開谷(1999)は、1970年代前半より徐々に子どもの遊び空間への大人の関与が顕著となり、特に1980年代以降、子どものスポーツの教育環境も変化したことを指摘している。そして、子どもは塾や習い事やスポーツ少年団、スイミングスクールといった大人が管理する組織に吸収され、大人と子どもが「教える - 教えられる」「指示する - 指示される」関係にあることを危惧している(新開谷,1999)。また、内海(1988)も同様の視点から、大人文化として確立したスポーツを与えられるだけでは、子どもたちにとっては管理でしかないことを指摘しつつ、大人が主役となるスポーツの教育環境からの子どもの解放を訴えている。そして永井(2013)は、子どもにとってスポーツが一つの習い事へと転化しつつある現状に対し、子どもたちが幼い頃から物事を「習う」という図式の中に浸りきることへの危機感を募らせている。

こうした議論にも見られるように、現代社会における子どものスポーツの教育環境に対する問題提起は、1980年代後半以降継続的に議論されてきた。それは例えば、早期教育・早期指導、管理主義教育、子どもスポーツの商業主義化・成果主義化、子どもの生活時間に占めるスポーツ活動時間の増加などの問題である(山本,1988a,1988b,1993,1999;内海,1988;高橋,1999)。また、スポーツ関係組織の運営方針、指導プログラムの内容や指導場面の人間関係についての議論、すなわち勝利至上主義、親や指導者による過干渉など、教育の方法論的な問題も議論されてきた(岡本,1995;加賀山,1996;永井,2006;山本,2007)。これらの議論に共通するのは、子どもの教育の場として、現在のスポーツの教育環境は十分か否かという問題提起である。そしてその中心的な課題は、現在の子どもスポーツが、総じて習い事と化していることへの現状批判である。

(2) プラグマティズム思想におけるコミュニティ形成に関する議論の整理

上記「研究開始当初の背景」でも述べたとおり、プラグマティズム思想におけるコミュニティ形成に関する議論の中でも、本研究ではJ.デューイの理論に依拠することとした。これは申請者自身が本研究に取り組む以前から着手していた研究において、既に有益な知見が得られていたためである。ここでも先行研究を概観することで、議論を以下のように整理した。

プラグマティズムとはアメリカの思想家や哲学者らに共通するものの見方や考え方の総称であり、その潮流は19世紀後半に始まり、20世紀に集大成され、21世紀へと引き継がれている。なお、プラグマティズムの思想家の中でも特に教育の分野に対し多大な貢献を果たし、後の教育の世界にも影響を与えた人物としてデューイは著名である。

デューイの教育理論は日本の教育にも大きな影響を与えた教育思想の一つであるとされ、特に戦後のアメリカ教育使節団による教育改革によって、日本の教育はアメリカ式の考え方、所謂プラグマティズム思想の教育理論を受容しつつ、それに基づく教育方針へと転換することとなる。佐藤(1998)によれば、デューイは生涯にわたって民主主義の実現を促進する教育と倫理の意義について探求し続け、民主主義の危機を公共性と共同体の解体において洞察したとされる。すなわち、デューイにとっての教育の目標とは、民主主義を実現するための態度や思考を身につけた人々によって作り上げられる共同体の形成にあった。

このように、デューイ自身は社会変革を目指すための過程として教育を位置づけていたが、彼が論じる民主主義という言葉は単なる政治的な意味合いの言葉ではない。デューイにとっての民主主義とは、「生き方」の哲学であり、多様な人々が「共に生きること」と定義されるものである。それはすなわち、多様な人びとが協働し連帯し、それによって生活を営んでいく際の、人びとの生き方の問題であるとされる(大賀,2015)。また、その民主主義の考え方の上に形作られるデューイにとっての共同体とは、民主主義という信念を中核として、人々が自由に参加し協同して構成する社会を意味していたのである(佐藤,1998)。このようにデューイの教育理論では、民主主義を実現するための態度や考え方を育む教育こそが、最大の目的として位置づけられていたものであり、彼は民主主義社会を打ち立てるために、人々が共同して働くための技法を広く教育によって提供していくことが公教育の使命だと考えていた(宇野,2013)。

なお、デューイは民主主義を実現するための態度や思考を共有した人々による社会の形成という教育目標を実現するための具体的な手法として、「仕事 = 専心活動(occupation)」を通じた教育を重視していた。この仕事(occupation)の具体例としては木工、金工、調理、裁縫、織物などの手仕事挙げられており、それは言わばあらゆる日常的な創作活動に当てはまるものである。すなわち、デューイは人間の生活全般に関わる創作活動を仕事(occupation)と呼び、それらを教育手段として重宝していた。そして、そのような仕事(occupation)に他者と協同で取り組むことで民主主義的な態度や思考を育むことをデューイは教育目的としていたのである。

(3) 人々の交流の場としてのスポーツ環境の原理モデルの検討

本研究が依拠するデューイの理論の一つであるアートに関する議論を読み解き、それをスポ

ーツ環境へと適用するための原理モデルとした。ここでの議論は以下のようにまとめられる。

デューイは公教育を通して民主主義を実現するための態度や思考を育むことを試みていたが、他方では、アートを通して地域コミュニティの紐帯を再生することにも取り組んでいた。なお、デューイにとってのアートとは、単なる芸術ではなく「もの」「こと」「ひと」「場所」との交わりを通じたあらゆる創造的な活動を意味するものであった。そして、デューイはアートという視点から独自の教育理論とアート論を展開し、アート活動の中に教育の可能性を見出したのである。先述した通り、デューイの教育実践は1900年代初頭、世界各国で教育改革を巻き起こした新教育運動の一環に位置づけられているが、新教育の特徴はアート教育、すなわち美術、音楽、演劇、文学などをカリキュラムの中心に設定していたことにある。

さて、デューイは芸術を日常生活から切り離して特権化するような通念の打破を目指していたとされる(今井, 2003)。デューイはその点について、次のように述べている。「現在の美術館や画廊は、アートを神殿、広場、その他の共同生活の諸形態の附属物とするのではなく、アートを隔離する原因の幾つかを説明している。」「アートを遠隔の台座に置こうとする観念は、極めて広範に、また微妙に染み渡っている。」(デューイ『経験としての芸術』p.12) すなわちデューイは、アートを制度化された閉域的な仕切りのなかの活動から、人と人をつなぐ市民の活動とコミュニケーションの空間へとひらく方途を探求したのである(上野, 2013)。デューイが活躍した1930年代当時のアメリカは世界恐慌の最中であって、F.ルーズヴェルト政権によるニューディール政策が展開され、その一環として芸術文化事業が推し進められていた。それは、世界恐慌の中で失業に苦しむ数多くのアーティストに対し大々的な経済支援策を講じるという事業であり、その際、政策と鑑賞、高級とポピュラー、アートと社会生活を結ぶデューイ流のプラグマティズムが重要な役割を担ったとされている(上野, 2013)。

このようにデューイは、社会の中におけるアートの位置づけの変革を目指しており、上野(2013)が提示したデューイとアートとの関わりに関する議論を総括するならば、そのアート論は次のような展開や発展に繋がったとされる。アートをとり巻く二項対立概念の打破、アートと社会生活という対立の打破、アートとコミュニティの学びを結び付けることによるアートの公共空間の創出。アートをとり巻く二項対立概念の打破とは、すなわち制作と鑑賞、観る者と観られる者、生産と享受、高級芸術とポピュラー芸術などのアートを語る上で必ず議論される二項対立型の考え方の解体を意味している。それは、互いに働きかけ働きかけられながら美的経験の質を高めていく、あるいは双方にとって制作的な経験であるとともに受容的な経験でもあるというような、相互性と協同性のプロセスのうえにアートを成り立たせることを意味しており(上野, 2013) この考え方がアートと社会生活の対立の打破へと繋がることとなる。アートと社会生活という対立の打破とは、日常的な制作活動と芸術的な制作活動の垣根の解体を意味している。デューイはこの点について次のように述べている。「自分の仕事に従事し、その仕事を立派に仕上げようと心がけ、自分の製品に満足を見いだし、真の愛情を持って材料や道具を扱う知的な職工は、芸術的にその仕事に携わっているといえる。」(デューイ『経験としての芸術』p.15)

このようにデューイは、日常的な制作活動もアートの活動としての価値を持つと考えており、それはすなわち、日常的に行う何気ない制作活動の中にも民主主義的な態度や考え方を育むためのきっかけとなる協同作業が含まれていることを意味している。そして、デューイのアート論はアートとコミュニティの学びを結び付けることによるアートの公共空間の創出を後押しし、1930年代当時のアメリカにおいて、「コミュニティー・アート・センター」と呼ばれるワークショップ型の学びの場の提供へと繋がったのである。結果として、デューイによって展開されたアートを中心に位置づけた教育理論は、パブリック・アートやワークショップの実践を中心に『アートと学びの公共空間』を開くことに大きく寄与することとなったとされる。

デューイは、アート活動を通じた教育により民主主義的な態度や考え方を育んだ人々が生まれ、その人々が集まることによって共同体が形成されると考えていた。このデューイが展開したアートを中心に位置づけた教育理論は、近年再評価される傾向にあり、その理論を基にしつつ様々な教育活動が展開されている。例えば、荻宿(2012)は、ワークショップがコミュニティ形成(仲間づくり)のための他者理解と合意形成のエクササイズになるとして、ワークショップ型の学びを企業や大学、地域活動へと広めている。また、アートと学びの公共空間の創出の取り組みとして、海外では「ミュージアム・エデュケーション」と呼ばれる取り組みが見られるようになった。そこでは、教育を射程に入れたミュージアムでの活動が目指されており、学校との連携やワークショップなどの多種多様な試みが行われている。そして、2011年に起こった東日本大震災以降、地域共同体の重要性が再認識され、その再生が叫ばれるようになったが、アートを通じた地域共同体再生活動として、「コミュニティデザイン」のような取り組みも展開されるようになった(山崎, 2011)。これらの活動は、アートとの関わりを通じた学びが民主主義的な態度の育成や共同体づくりに繋がることを示す上での実践例として捉えることができる。

(4) スポーツ環境の理想的な在り方の解明

本研究が依拠したデューイの理論、およびそれを実践する活動はスポーツや体育の分野へも適用可能であると考えられる。すなわち、デューイにとってのアート概念が人間の生活活動全般に関わる創造的活動の全てが当てはまるものであることを鑑みるならば、そこにスポーツや身体活動も含めた議論も可能であると考えられる。また、これまでに概観してきたデューイのアー

ト論で明らかとなったアートとの関わり方を通した新たな教育や学びの形は、スポーツとの関わり方の議論として読み解くことも可能であると考えられる。このような観点から、本研究の総括として、スポーツ環境の理想的な在り方を以下のようにまとめた。

デュイのアート論、およびミュージアム・エデュケーションの取り組みから導き出される一つのアイデアが、スタジアム・エデュケーションの可能性である。現在、プロ野球やJリーグに限らず、国内では多くのプロスポーツ、アマチュアスポーツの試合が全国各地のスタジアムで開催されている。そこにおいて近年では、スタジアム内で単に選手がプレーをし、観客がそれを観戦するだけでなく、工夫を凝らした様々な取り組みが行われるようになってきている。それは例えば、観客としての空間の創出、観客によるフィールドイベント、スポーツボランティア活動などである。こうした活動をデュイのアート論の枠組みに当てはめれば、観客としての空間の創出は制作と鑑賞の解体を意味しており、観客によるフィールドイベントは観るものと観られるものの解体を意味していると考えられることができる。また、スポーツボランティア活動は、本来観客となる側の人間がその空間自体を自ら生み出す存在として振る舞っているという点で、生産と享受の解体として捉えることもできる。このように、スタジアムで行われるスポーツの試合で見受けられる各種の取り組みは、スポーツを「みる」「支える・創る」という関わり方によって、アートとしてのスポーツ活動という価値づけができるものであり、それはスポーツとの関わりが学びの機会の創出にも繋がることを意味しているのである。

また、デュイはアートと社会生活という対立の打破を目指していたが、スポーツ活動においても他の社会生活との活動の垣根が解体されつつある。例を挙げるならば、ランニング、サイクリング、フィットネスなどの身体活動を取り入れたライフスタイルの流行や、音楽フェスティバルとアウトドアの融合、ランニングイベントの開催などがそれに当たる。そこでは、スポーツ、音楽、ファッションなどの各種の文化活動がひとつに融合され、アートと社会生活、スポーツと社会生活、スポーツとアートのそれぞれの垣根の解体が起こっているのである。このように、スポーツ活動が他の活動と融合し、日常生活の中にも取り入れ易い活動になりつつあるという現状を見ると、アートとしてのスポーツ活動という考え方が、スポーツに取り組みやすい社会的背景を創出し、「行う」スポーツの振興に繋がるという点で、生涯スポーツ社会の実現にも貢献できる理念にもなり得ることが考えられるのである。

以上のように、デュイのアート論の視点からスポーツをアート活動として捉えること、すなわちスポーツを協同活動として捉えることにより、スポーツの新たな価値づけが可能になるのである。そしてその中でも、アートとしてのスポーツという見かたは、スポーツとの関わりを通した共同体の形成という新たなスポーツの価値づけへと繋がるものである。

さて他方で、スポーツだけでなく学校体育においてもデュイの考え方が用いられ、近年ではアートの学びを取り入れた体育が展開されるようになってきている。学びを取り入れた教育改革の論者である佐藤（2012）が提唱する「学びの共同体」の考え方の中では、学習者と対象・自己・他者との対話的实践による学びが目指されている。そして佐藤（2012）自身が、「学びの共同体」としての学校像はデュイが1896年にシカゴ大学に附設した実験学校に由来すると述べているように、その理論的基盤にはデュイの教育理論が存在しているのである。そして近年では、この「学びの共同体」の考え方が体育へと適用されることで、「体育における学びの共同体」の実践も展開されている（岡野・佐藤，2015）。ここでは、体育における対話的学びの実践が目指されているが、体育こそが「学びの共同体」の追求している学びが最も魅力的に展開する教科であるとしている。この佐藤（2012）による「学びの共同体」に関する議論と本研究での議論との関係性については更なる検討の余地があるが、本研究で示したスポーツとの関わりを通した共同体の形成というスポーツの価値は、学校体育における教育の可能性を考える上での新たな視点になり得るであろう。これまでの学校体育においては、スポーツが重要な教材の一つとして捉えられてきたため、スポーツとの関わりを通した共同体の形成は、教材としてスポーツを用いる学校体育の中でも実現可能なものであり、それは学校体育における新たな学びの機会や教育課題を生み出すことにも繋がると考えられるのである。

近年、社会全般の中からデュイを含むプラグマティズム思想は再評価される傾向にある。現代社会において、同質・近質な他者をつくる共同体、所謂昔ながらの村落共同体は崩壊して久しい。そのような現状にあって、今求められる共同体とは異質な他者も含む共同体であると考えられることができる。情報化社会の進展や交通網の整備により、現在では社会生活を送る中で、文化やアイデンティティ、価値観、宗教観などが大きく異なる人々との交流の機会が増えてきている。それはすなわち、従来までとは異なる異質な他者との関係の中においても、共同体を形成していくことが求められているということである。デュイが示したアート活動を通した教育による民主主義的な態度や考え方の育成と共同体の形成という視点からスポーツを考えることには、スポーツとの関わりを通した共同体の形成の可能性が内包されている。スポーツという文化が世界的に広がる中で、共同体の形成への寄与という価値は、これからの時代において求められる人々の交流の場としてのスポーツ環境の持つ大きな力であると考えられるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高橋徹	4. 巻 第67巻第6号
2. 論文標題 J. デューイの経験と成長からみる体育・スポーツ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 407頁 411頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋徹	4. 巻 第65巻第7号
2. 論文標題 「主体的・対話的で深い学び」で広がる体育の可能性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 20頁 23頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋徹	4. 巻 第48号
2. 論文標題 戦後の民主体育とJ. デューイの教育思想との関係に関する一試論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 体育哲学年報	6. 最初と最後の頁 17-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋徹	4. 巻 第67巻第11号
2. 論文標題 アートとしてのスポーツの探究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋徹
2. 発表標題 体育が担う教育課題：デューイ教育論を基点にした検討
3. 学会等名 日本体育学会体育哲学専門領域平成29年度第1回定例研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋徹
2. 発表標題 戦後の民主体育とJ. デューイの教育思想
3. 学会等名 日本体育学会第68回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋徹
2. 発表標題 市民性教育としての体育に関する研究
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋徹
2. 発表標題 デューイの教育論的視座からの野外教育の再評価
3. 学会等名 日本野外教育学会第22回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高橋 徹	4. 発行年 2018年
2. 出版社 みらい	5. 総ページ数 176
3. 書名 はじめて学ぶ体育・スポーツ哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----